

「私となんて話してて楽しいの?」

ふと会話が途切れた次の瞬間に、こうやって訊ねられるのもう何度目だろう。

「もちろんさ。かわいい魅杏ちゃんとかうやつて話できる週末が楽しみだから、俺は平日の仕事頑張るんだよ!」

「ふーん…… また大げさなこと言っちゃって。本当はどうなんだか……」

魅杏が首をかしげると、リボンで結われた長い髪がミニの浴衣の上で柔らかく揺れた。

安っぽい印象のあるクラブのコスプレ衣装も彼女が着ているとんだか本格的に見えるのは、流石はモデルと言ったところだろうか。

「はい、新しいお酒。なによ、じろじろ見て。いやらしい!」

「魅杏ちゃんの浴衣姿が可愛かったからだよ。その格好、最高にセクシーだよね」

「……最低。あなたって、そういうところしか見てないんだ」

俺に向かってグラスを差し出そうとして前屈みになったおかげで、浴衣の胸元が開いて魅杏の控えめな胸の谷間が少しだけ見えた。

俺の視線の先に気づき、浴衣の胸元を慌ててあわせ直す魅杏。

指名し始めた頃は、何をしても、何を言ってもこんなふう

反応をされてだいぶ凹んだものだった。

この店がホストガールの素人つぼさを売りにしている部分があるのは判っている。とはいえ、せっかく指名してくれた客に対してその態度は無いだろうと思っただものだ。

「ふわ…… 疲れたな。ちょっと眠くなって来ちゃった」

「疲れたって、モデルのお仕事でなにかあったの? そろそろ暑くなってきたから、外で撮影とか大変でしょ」

「そうなのよ! 今日の撮影なんかホント最低だったの。何も日陰が無いところで真っ昼間に二時間も待たせられたのよ! 日焼けしないようにしてるだけでも大変で……」

昼間の日射しを思い出すように魅杏が自分の腕をさする。

「あなたも、私を誘うときは気をつけてよね。モデルに日焼けは大敵なんだから! この前だって、大変だったじゃない」

「それって、日焼けに気をつければ次もオーケーだってことかな?」

「……知らない!」

俺のからかいに、むきになって顔を背ける魅杏。その頬がほんの少しだけ赤くなっているように見えるのはお酒のせいか、それとも他のことが原因なのか。

この数ヶ月のあいだ彼女の元に通い詰めたおかげで、こう言う態度が彼女なりの照れ隠しなんだらうだということがようやく判ってきた俺だった。

「そういえば魅杏ちゃんって、みおちゃんと仲が良かったっ

て?」

「そうなの。あなたみたいに話しやすいから、この店の女の子の中だと一番仲が良いかもしれないわね」

じゃあ仲が悪いのは誰なのか? とふと思つたがそれ聞くほど俺も野暮じゃない。率直すぎる雪あたりと反りが合わないそうに思えるが、実際の所はどうなのやら。

「みおちゃんは発明が趣味なんだよね? 魅杏ちゃんと話が合うなんて意外だな」

はじめは魅杏が手が離せないときにヘルプで入って来たのがみおとの出会いだったけど、その後も魅杏が休みの時などに何回か指名して話していた。

魅杏とは違った意味で変わった女の子だな、と初対面で思つたのを覚えている。華やかなモデルと、どちらかと言えば地味な発明家の女の子に共通の話題なんてあるのだろうか?

「私も、あんまり発明の難しい話はわからないかな。でも、代わりに私からみおちゃんに黒魔術を教えてあげてるの」

「黒魔術……?」
「あれ、あなたには話してなかったっけ? 私、黒魔術が趣味なの」

だからコスプレダーの魔女衣装は着慣れているの、と魅杏。

「黒魔術の話が発明のインスピレーションの源になるんだって。だから私も、お返しに発明したもののテストをやってあげたりしてるのよ。この前なんてね……」

魅杏が発明品をテストする過程で起きた苦勞を話してくれる。楽しげなその口ぶりが、何よりも彼女がみおを信頼していることを物語っている。

「魅杏ちゃんから何か作ってもらうのと頼んだりもするの?」

「私から? ええと……」

俺の何気ない問いかけに、魅杏はやたらと動揺する。まさか、人には言えないようなものを……

「まさか魅杏ちゃん、人には言えないようなものをみおちゃんに頼んで作ってもらってるとか?」

「サイテー あなたって、本当にエッチなことばかり考えてるのね」

「そう言う想像をする魅杏ちゃんも魅杏ちゃんだよ……で、実際どうなの? 何か頼んでるんだよね?」

「私は…… 私は、みおちゃんに、人付き合いが苦手なのを直す薬を作ってくれる予定なの」

そこで言葉を切り、魅杏は少しだけ目を伏せる。
「こんな事、薬に頼るのってあなたはと思う? やっぱ、自分だけの努力で何とかした方がいいのかな?」

「うーん、それは……」

正直なところ、みおの作る「人付き合いが苦手なのを直す薬」とやらがどんなものなのか俺は計りかねていた。今までにみおから聞かされた彼女の発明品は、どれもアイディアばかりが先走って実際は大したことがないものばかりだ。